新大學日本語

高等学校日语教材

日语精读

日本語精読

（第2版）

（大学四年级用）

大连外国语学院日本语学院 组织编写

主编　盛凯　孙佩霞

主审　蔡全胜

新大學日本語

大连理工大学出版社

高等学校日语教材

日语精读

（第2版）

（大学四年级用）

主　编　盛　凯　孙佩霞
副主编　邴　胜　宫　伟
编　者　李东辉　赵　宏　孟海霞
主　审　蔡全胜

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语精读 / 盛凯,孙佩霞主编. —2 版. —大连:大连理工大学出版社,2008.6(2011.6 重印)
高等学校日语教材
ISBN 978-7-5611-2968-5

Ⅰ. 日… Ⅱ. ①盛… ②孙… Ⅲ. 日语—高等学校—教材 Ⅳ. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 084270 号

大连理工大学出版社出版
地址:大连市软件园路 80 号 邮政编码:116023
发行:0411-84708842 邮购:0411-84703636 传真:0411-84701466
E-mail:dutp@dutp.cn URL:http://www.dutp.cn
大连力佳印务有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:140mm×203mm 印张:12.125 字数:301 千字
印数:7001～8000
2004 年 8 月第 1 版 2008 年 6 月第 2 版
2011 年 6 月第 3 次印刷

责任编辑:宋锦绣 张 凡 责任校对:海 洋
封面设计:孙宝福

ISBN 978-7-5611-2968-5 定 价:24.00 元

第2版前言

《日语精读》(大学四年级用)是高等院校日语专业高年级使用的精读教材,是高等院校外语专业面向21世纪教学内容和课程体系改革的主要课题《新大学日本语》的系列丛书之一。

本教材出版三年来,作为大学四年级教材,由于它涵盖了日本语言、文化、文学等诸多领域,适应了本科高年级日语教学的要求,以题材丰富、内容新颖、古今结合等特点,受到了广大师生的好评。

但是,在使用该书的教学实践中,我们也发现了一些需要改进与完善的地方。我们广泛征求了一线日语教师的意见,并吸收了从事四年级教学的一线教师参加再版编写,吸取了"高级日语"集体备课的精华,在修订了印刷错误的基础上,修正了部分课文内容,规范了标记形式,删除了一些较长的、不适应教学的文章,增加了部分较实用的随笔、评论等文章。

第2版《日语精读》(大学四年级用)仍坚持以《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》为依据,经过再版,整个教材在教学内容上更加丰富多彩,形式上更加规范、准确。

在编写《日语精读》(大学四年级用)第2版的过程中,得到了在大连外国语学院任教的日本专家的指导和大力支持,一线授课教师对本教材的再版也提出了中肯的意见,大连理工大学出版社对该书的出版给予了大力的支持与帮助,在此一并表示衷心的感谢。

虽然编者克尽努力,但难免还会有疏漏和不足之处,欢迎批评指正。

编　者

2008年5月

前　言

《日语精读(大学四年级用)》是高等院校日语专业高年级使用的精读教材,是高等院校外语专业面向21世纪教学内容和课程体系改革的主要课题《新大学日本语》的系列丛书之一。

《日语精读(大学四年级用)》共计26课内容,涵盖了日本语言、文化、文学等诸多领域,作品包括散文、随笔、小说、评论、诗歌、短歌、俳句等多种形式,内容多是作为日语本科生应掌握的语言和文化知识。每课由学习目标、课文、文章出处、作者简介、词语解说、问题等部分构成,并在每单元课后附有一篇知识性强、主题深刻的课外读物。为了便于读者学习,在书后还附上了每课问题的参考答案及日本文学史年表。

本教材以《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》为依据,突出培养对日语的综合理解能力,力求使学生在修完《日语精读(大学三年级用)》的基础上能有进一步提高。该书选材丰富多彩,并注重将语言、文化和文学有机结合,尤其是在文学作品的选材上、力求由浅入深,使不同时代的各个作品之间系统地衔接起来,使学生通过对文学作品的学习,进一步加深对日语及日本文化的综合理解能力。

本书在编写过程中,得到了在大连外国语学院任教的日本文学专家阿部敏夫教授的指导和大力支持,对编写工作提出了许多合理的建议。谨此一并表示感谢。

由于编者水平有限,加之时间仓促,书中难免有这样或那样的错误和缺憾,恳请读者批评指正。

编　者

2005年5月

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目　次

随筆・評論

第 1 課　はじめの一冊…… 森　まゆみ　1
第 2 課　「ぞうさん」とまどさん …… 阪田寛夫　9
第 3 課　ことばと身体 …… 前田　愛　22
課外読み物：ことばとは何か …… 服部四郎　35

韻文

第 4 課　詩 …… 38
1. 追憶の母 …… 田中冬二　38
2. 八月の石にすがりて …… 伊藤静雄　40
課外読み物：記号論への招待…… 池上嘉彦　43
第 5 課　短歌 …… 45
第 6 課　俳句 …… 48
課外読み物：日本人の美意識
…… ドナルド・キーン　著　金関寿夫　訳　51

随筆・評論

第 7 課　オオカミが来た！ …… 佐藤　信　53
第 8 課　文化論の陥穽 …… 山崎正和　63
第 9 課　おそれという感情 …… 唐木順三　83
課外読み物：出たがりと引っ込み …… 岡部朗一　95

随筆・評論

第 10 課　移動時間…… 河野多恵子　99
第 11 課　貨幣と虚しさ …… 内山　節　106
第 12 課　水の東西 …… 山崎正和　119
課外読み物:日本人気質
…… ジョナサン・ライス/嘉治佐保子/浜矩子　125

古典

第 13 課　おくのほそ道 …… 松尾芭蕉　132
1. 人生は旅 …… 132
2. 飯塚の里 …… 134
3. 山中 …… 136
課外読み物:公家の論理・武家の論理 …… 上横手雅敬　141
第 14 課　孔子の言葉 …… 144
課外読み物:知の旅への誘い …… 中村雄二郎　155
第 15 課　和歌 …… 小池　保　158
課外読み物:和歌表現の手引き …… 165

随筆・評論

第 16 課　花とKさん …… 佐江衆一　167
第 17 課　資源循環型社会への道 …… 三橋規宏　173
第 18 課　「生きる」ということ …… 河合雅雄　195
課外読み物:「甘え」について …… 土居健郎　209

小説

第 19 課　灰色の月 …… 志賀直哉　212
課外読み物:志賀直哉論 …… 小林秀雄　218
第 20 課　本覚坊遺文 …… 井上　靖　221

課外読み物:中国 名茶紀行 …… 布目潮渢　227
第21課　山月記 …… 中島　敦　230
課外読み物:中国と日本——中国小説の流れ … 尾上兼英　242

随筆・評論

第22課　小説の読者 …… 桑原武夫　245
第23課　「夜と霧」の爪跡を行く …… 開高　健　252
課外読み物:夜と霧
　ヴィクトール・E・フランクル　著　池田香代子　訳　258
第24課　かたりべ文化 …… 外山滋比古　265

随筆・評論

第25課　他人の眼 …… 大庭みな子　269
第26課　私の個人主義 …… 夏目漱石　280
第27課　自我構造の危機 …… 岸田　秀　298
課外読み物:西洋文学の魅力 …… 桑原武夫　311

古典

第28課　枕草子 …… 清少納言　314
第29課　源氏物語 …… 紫氏　部　318
　桐壺…… 318
課外読み物:源氏物語の舞台と背景 …… 山本利達　324

問題解答例…… 326
附録:日本文学史年表 …… 359

〈随筆・評論〉

第１課
はじめの一冊

森 まゆみ

【学習目標】

最初に読んだ文学作品は何か。その時どんなご感想だっただろうか。

作品の展開に即して、「私」の心情を読み取り、文学への理解を深めるとともに、読書に対する関心を高める。

【本文】

ある晩、酔った父が『フランダースの犬』の絵本を土産に帰って来た。

「開けてみなさい。」と言ったくせに、開けて喜ぶ私の顔を見るや、「もう寝なさい。読むのはあした。」と二階に追い払われた。私と妹はたいてい八時になると自分で着替えて、「お休みなさい。」を言って寝ることになっていた。大人には大人の時間があるらしかった。もっとも父が寿司折りなどを土産に遅く帰るとき、「起きといで。」と母に体を揺すられ、深夜の饗宴となることもあった。それは夢のような時間だった。きっとこの日も、喜ぶ顔だけが見たくて無理やり揺り起こされたに違いない。はうんと早く目が覚めた。それでも明るかったから、きっと夏できっと夏であったのだ。東側の窓からは朝の光がさしのぞいていた。枕元には『フランダースの犬』。本をそうっと布団に引っ張

り込み、寝ている家族を起こさないように静かに絵本を眺めた。

ネロとパトラッシの物語。大きな銀色のミルクの缶を載せた荷車、フランダースの村はずれから、壊れかけた風車の見える小麦畑の牧場を越えて、木靴を履いた少年と犬は力を合わせて牛乳を運ぶ。目指すはアントワープ。

そこにはフランダース出身の偉大な画家ルーベンスの聖画が教会堂に飾られている。ネロはその絵が見たい。だけれど絵には覆いがかけられ、観覧料を払わないと見られないのだ。

「ああ、ぼく、あれが見られさえしたら、死んでもいいんだがなあ。」

ネロの切望、これは子供だけに許された生きることへの熱望である。がむしゃらに、一つことに向かって子供は突っ走る。これがしたい、あれが見たい、読みたい、食べたい、と。

その願いがかなえられない。私はネロと一緒になってルーベンスの絵が見たいと焦がれた。なろうことなら私がアントワープに行って、ネロのために白い布を引きはぐって見せてあげたい。

入ったばかりの幼稚園で、先生が『フランダースの犬』の紙芝居を読んで下さっていた。話はだいたいわかっていたのだけれど、父の買ってきた絵本は、それよりずっと絵も細かく、筋も詳しかった。裕福な粉屋の娘アロアにはちょっと嫉妬した。アロアに自分を感情移入するよりは、ネロをめぐる恋敵のように感じたのだ。

幼児がそんなことを考えるのか、と思うかもしれない。でも私はベージュ色のスモックを着て刺繍つきのハンカチを胸にぶら下げた幼稚園のH君に恋情を抱いたのもはっきりと覚えている。遠足で手をつないだり、長い滑り台をつながって滑り、小さ

な運動靴のカカトが触れてドキドキしたことも。図書室の、裏が緑のラシャで表が黒いサテンのカーテンに隠れた私を、いつ彼が見つけてくれるかと待ち受けていたことも。

つぶらな黒い瞳の、首筋の細そうなネロは、彼に似ていたのかもしれない。あんなに絵が上手なのに、絵の具が買えないなんて。黒と白でしか絵が描けないなんて…こういうとき女の子の読み方はすぐ母性的、無限包容的な読み方になってしまうのか、と今思うとうんざりするくらい、私はネロに同情した。戦後九年目に生まれた私には少なくとも、ネロのような物資の不足やつらい労働は縁のないものだったが、本で出会って想像することはできた。

胸が痛む、とよく形容するけれども、こんなときは本当に胸のあたりが痛くなるものだ。アロアの父コゼッツ氏に放火犯人と間違われたネロ、それなのに彼の財布を拾って届けたネロ。そして、絵のコンクールにはねられたネロは、ついにパトラッシとルーベンスの絵を見るのだ。そして幼稚園の紙芝居によると、絵を見た喜びに満足したネロとパトラッシは疲れてすやすやと眠り、翌朝、目覚めてまた元気に木の車を引っ張って、村に帰るはずであった。たしかそうなっていた。

な、なんということだろう。

「とうとう見たんだ！ おお、神さま、十分でございます。」

月の光のもとキリストを描いた憧れの名画が一瞬浮かんだとき、ネロは叫ぶ。そして犬の体をかたく抱く。

「ぼくたちはエスさまのお顔を拝めるだろうよ——あの世で。そしてエスさまも、ぼくたちを離ればなれにはなさるまい。」

あくる日、アントワープの人々は、教会堂の中で凍え死んだふ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

たりを見つけた。ネロは青ざめた顔をし、口もとにはほほえみさえたたえていた。死んでもふたりは離れず、村の人々は一つの墓に葬った。

ワッと私は泣いた。

嘘じゃないか。死なないことにした紙芝居の作者も、めでたしめでたしの結末を口をぬぐって読んでくれた幼稚園の先生も嘘つきだ。私はわんわん泣いた。家の人がびっくりして起きだし、そして夏の一日が始まった。

【出典】

教材本文は、『読書休日』(晶文社・一九九四年刊)による。「はじめの一冊」は、この本のための書き下ろしである。なお、教科書表記以外に本文の加除訂正はない。

【筆者】

森 まゆみ(もり まゆみ) 編集者・作家

一九五四(昭29)年~。東京都の生まれ。早稲田大学政経学部卒業。東京大学新聞研究所修了。出版社で企画・編集に携わり、のちフリー。一九八四年、仲間と地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を発刊。著書に『路地の匂い町の音』『鴎外の坂』『深夜快読』『寺暮らし』『東京たてもの伝説』『明治快女伝』『かしこ一葉』『明治東京畸人伝』『ひとり親走る』『日本の女』『谷中スケッチブック』『長生きも芸のうち』『小さな雑誌で町づくり』『抱きしめる、東京』『不思議の町・根津』など多数。

【語句の解説】

1.『**フランダースの犬**』 イギリスの女性作家ウィーダ(1839~

1908)の代表的児童小説。一八七二年刊。薄幸の少年ネロが、憧れの画家ルーベンスの描いたキリストの聖像を寒夜の教会堂に仰ぎながら、忠実な犬のパトラッシとともに命を終える結末には、永遠に生きる愛の精神が表現されている。「フランダース」はフランドルの英語名。地域・言語共同体として区分されたベルギーの地方の一つ。歴史上、ヨーロッパ経済の中心の一つとして大きな経済力を誇り、独特の文化を創出した。

2. **深夜の饗宴**　「饗宴」は「もてなしの酒宴」。ここでは、大人の気まぐれによって、思いがけないご馳走にありつく喜びをやや戯画的に表現した言い方。

3. **翌朝、私はうんと早く目が覚めた**　昨夜の父の土産である『フランダースの犬』に対する期待で目が覚めたということ。「うんと早く」という表現にその気分がある。

4. **ネロとパトラッシの物語**　「ネロ」は、『フランダースの犬』の主人公の少年。戦傷のために足が不自由になった「ジェハン・ダースじいさん」の孫。二歳の時、母の死によってみなしごとなり、八十歳のじいさんのもとに引き取られた。貧しくても優しく正直な心を失わない、絵の才能を持った子供。「パトラッシ」は、ネロの愛犬で、フランダース産の大型犬。金物商人の労役犬としてこき使われた結果、瀕死の状態で捨てられているところを、じいさんとネロによって助けられ、彼らと暮らすようになる。年齢はネロと同じ年とされる。彼らは村からアントワープまで牛乳を運び、細々と生計を立てている。やがて、じいさんが年老いて寝たきりになり、六歳のネロはパトラッシとともに、牛乳運びの仕事を続ける。物語の中心場面では、ネロは十五歳になっている。クリスマスの前の週、じいさんが死に、ネロは長年住み慣れた小屋を追われることになる。

5. **アントワープ**　ベルギー北部スヘルデ川の河口に臨む工業都市でアントワープ州の州都。ヨーロッパ有数の貿易港を持ち、国内では首都ブリュッセルに次ぐ第二の大都会である。
6. **ルーベンス**　一五七七～一六四〇。フランダースの画家。十七世紀の最も重要な画家と見なされ、その作品はバロック絵画の、活気のある、豊かな官能的性格を代表している。
7. **切望**　心からそのように望むこと。「熱望」もほぼ同じ。
8. **がむしゃら**　周囲の思惑やことの成否などは考えずに、自分のやろうと思ったことを強引にやってしまうこと。
9. **焦がれる**　他のすべてを犠牲にしても、そういう状態になってみたいと一途に思いつめる。
10. **なろうことなら**　なれることなら。もし、できることなら。
11. **裕福な粉屋の娘アロア**　風車の家に住む、村で一番の裕福な粉屋の「コゼツだんな」のひとり娘。十二歳。画家を目指すネロの唯一の理解者であったが、コゼツだんなはネロとアロアの交際を禁じてしまう。
12. **感情移入**　自己の感情や思い入れを対象に投影させること。
13. **恋敵**　恋の競争相手。ライバル。
14. **ベージュ色のスモック**　「ベージュ色」は、薄くて明るい茶色。「スモック」は衣服を汚さないように衣服の上から着るゆったりとした上っ張り。幼稚園の制服。
15. **ラシャ**　織り目がはっきりせず、けばだった厚手の毛織物。
16. **サテン**　縦糸あるいは横糸を織物の表面に浮かせた滑らかで艶のある絹織物。繻子(しゅす)。
17. **つぶら**　丸くてかわいい様子。
18. **母性的**　子供を守り育てようとする母親としての本能的性質に沿っていること。

19. **包容的**　広い心で、欠点などにこだわらずに相手を受け入れること。
20. **無限包容的**　限りなくどこまでも相手を受け入れてしまうこと。
21. **アロアの父コゼツ氏に放火犯人と間違われたネロ**　アロアとの交際を禁じられたネロは、雪の中で拾った人形をあげようとアロアの家をこっそり訪れる。その晩、アロアの家が火事になったため、ネロは放火犯ではないかと疑われ、村中の人から冷たい仕打ちを受ける。
22. **財布を拾って届けたネロ**　じいさんが亡くなり、唯一の希望であった絵のコンクールでも選ばれず、失意を抱いて村に帰る途中、パトラッシが雪の中から二千フランという大金の入った財布を見つける。ネロはそれを届けてアロアの一家を破滅から救うが、パトラッシを預けて自分は吹雪の中に出ていってしまう。
23. **絵のコンクールにはねられたネロ**　「絵のコンクール」は、アントワープで行われたもので、十八歳以下の少年なら誰でも応募できる。ネロは春から秋までかかって、倒れた木に腰掛けて休む年老いたきこりの絵をチョークで描いて応募した。彼の作品は入選しなかったが、彼の死の直後、世間に名声の高い一人の画家が現れ、その作品を激賞し、ネロは前途有望な天才児と評価されたのだった。
24. **な、なんということだろう**　幼稚園の紙芝居とは違う結末に対する驚きの表現。物語の世界に深く入りこんでいたために、衝撃はより大きなものであったと考えられる。
25. **「とうとう見たんだ！　おお、神さま、十分でございます。」**　住む場所を失い、絵のコンクールでもはねられたネロはパトラッシをアロアの家に預け、死を覚悟して吹雪の中をアント

ワープの教会堂に向かう。ネロは、覆いを引き剥がし、あとを追ってきたパトラッシとともに、おりからさしてきた月光の中で憧れの名画を見る。彼のこの世での最後の願いがかない、「おお、神さま、十分でございます。」という叫びになる。

26. **キリストを描いた憧れの名画** 「十字架を立てる」と「十字架から下る」の二つの絵であるとされている。

27. **「ぼくたちはエスさまのお顔を拝めるだろうよ…離ればなれにはなさるまい。」** 願いを果たし死を覚悟したネロは、そのキリストにあの世で再会できることを確信して「ぼくたちはエスさまのお顔を拝めるだろうよ——あの世で。」とパトラッシにささやく。

28. **口をぬぐって** （盗み食いをした後で、口をふいてそしらぬ顔をする意から）何か悪いことやまずいことをしていながら、していないふりをして。あるいは、知っていながら、知らないふりをして。ここでは後者。

【問題】

一、「ワッと私は泣いた。」のはどうしてだろうか。次の点に注意して、その理由をまとめてみよう。

(1)ネロに対する思い。

(2)幼稚園の紙芝居とは違う絵本の結末。

二、ここで語られているようなことを経験したことはなかったか、話し合ってみよう。

三、この文章の題名が「はじめの一冊」となっているのはなぜか、考えてみよう。

四、本文の要旨を200字以内にまとめなさい。

〈随筆・評論〉

第2課
「ぞうさん」とまどさん

阪田寛夫

【学習目標】

歌詞についての自分の受け止め方が作者の思いとは必ずしも一致していなかったことを知った筆者の、童謡「ぞうさん」とその作者に寄せる思いを著した文章を読んで、歌詞に込められた作者の思いを理解し、筆者の心情を共感する。

【本文】

「ぞうさん」は戦後の童謡の代表作だと言われている。人が言うだけではなく、私もそう思う。

いい歌と好きな歌とがある。あの歌はいい、と人が言う場合、本当はあの歌は好きだということである。私が「ぞうさん」がいいと思うのは、実はこの歌が好きなのだ。しかし同時に、自分の好みと切り離しても、「いい歌」であると思いたい。

「かなりや」や「しゃぼん玉」のようにおおぜいの人に好かれる歌には、その成立にまつわる伝説が、時には作者も気づかぬうちにできたりする。「ぞうさん」にも、いかにもこの歌らしい美しい挿話があって、「ぞうさん」びいきの私はその話まで大好きになった。

——私が持っている新聞の切り抜きによれば、詩ができたのは「昭和二十三年の春」で、このころ、まど・みちお氏は食品会

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com